

第 26 回国際昆虫学会(ICE)参加報告

弘前大学農学部生物学科
准教授
山尾 僚

第 26 回国際昆虫学会 (International Congress of Entomology) は、7 月 17 日～22 日の日程でフィンランドの首都であるヘルシンキで開催された。本学会は、昆虫を題材とした分子から生態までの幅広い分野の科学者が一同に会して 4 年に一度開催される。今大会は、2020 年度大会がコロナウイルスの影響で 2022 年まで延期され、開催されたものである。



図 1 ポスター会場の様子.

コロナウイルスの感染が広がる中、オンライン化する学会が多い中、対面での開催となった本学会では、参加人数が例年と比べて少なくなるなどの影響はあったものの、会場では常に熱い議論が交わされていた。

本学会は基礎科学分野のみならず、害虫管理の観点からの応用研究の発表も多く、私が参加したセッションにおいても、日本や中国から欧米に侵入して問題化しているクサギカメムシの個体群動態に関する発表や、農地管理と害虫発生プロセスに関する話題がイタリアやマレーシアの研究者らからもたらされた。



図 2 口頭発表の様子.

私は『 Plant-to-plant communication aboveground reduces root nodule symbiosis』と題して、畑地雑草であるセイタカアワダチソウから放出される揮発性物質を受容したダイズは、葉のサポニン濃度を上昇させて食害に備える一方で、根粒共生が減少することについて発表を行なった。植物の揮発成分を用いた害虫管理方法は様々な作物での適用が検討されているが、根の共生微生物には悪影響を与える可能性について発表した。今後、どのような条件では揮発性物質を用いた害虫管理が有効になるのかなど、より詳細な検討をすすめることで、植物の揮発性物質を用いた新たな防除技術の開発も期待できるだろう。また、本発表内容について化学生態学の専門家である Volf 博士とも会場で議論を交わすことができた。



図 3 懇親会の様子.

今回、報農会から ICE の参加を補助していただいたことで、国際的な研究協力関係も築くことができました。今後も本助成で築いた国際協力関係をベースとして、植物防疫研究の国際的な発展に寄与したいと考えております。改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。